日本のピノ・ノワール、その先の可能性

気候変動時代における、新たな銘醸地への挑戦

JAPAN PINOT NOIR × THE NEXT FRONTIER

INTRODUCTION

なぜ今、日本のピノ・ノワールなのか

ピノ・ノワールは、フランス・ブルゴーニュを故郷とする世界最高峰の赤ワイン用品種。栽培の難しさから「気難しい貴婦人」とも呼ばれますが、近年その適地が北海道だけでなく日本各地へと広がりつつあります。



世界が認める高貴品種

ブルゴーニュを筆頭に、世界最高値で取引されるワインを生み出す赤ワイン用品種の代表格。



冷涼な気候でしか育たない

薄い果皮と早熟な性質から、暑さや多湿に弱く、栽培できる土地が世界的にも限られている。



日本各地で挑戦が拡大中

気候変動により、北海道に加え長野・山形・岩手など全国で栽培への挑戦が広がっている。

ABOUT THE VARIETY

ピノ・ノワールという品種の個性

栽培の難易度が高いぶん、気候や土壌の個性がそのまま味わいに表れやすい、テロワールを映す品種でもあります。

薄い果皮

色素・タンニンが少なく、繊細で優美な味わいを生む。病害にも弱い。

冷涼気候を好む

生育期の平均気温が高すぎると、酸が落ち凡庸な味わいになりやすい。

早熟な性質

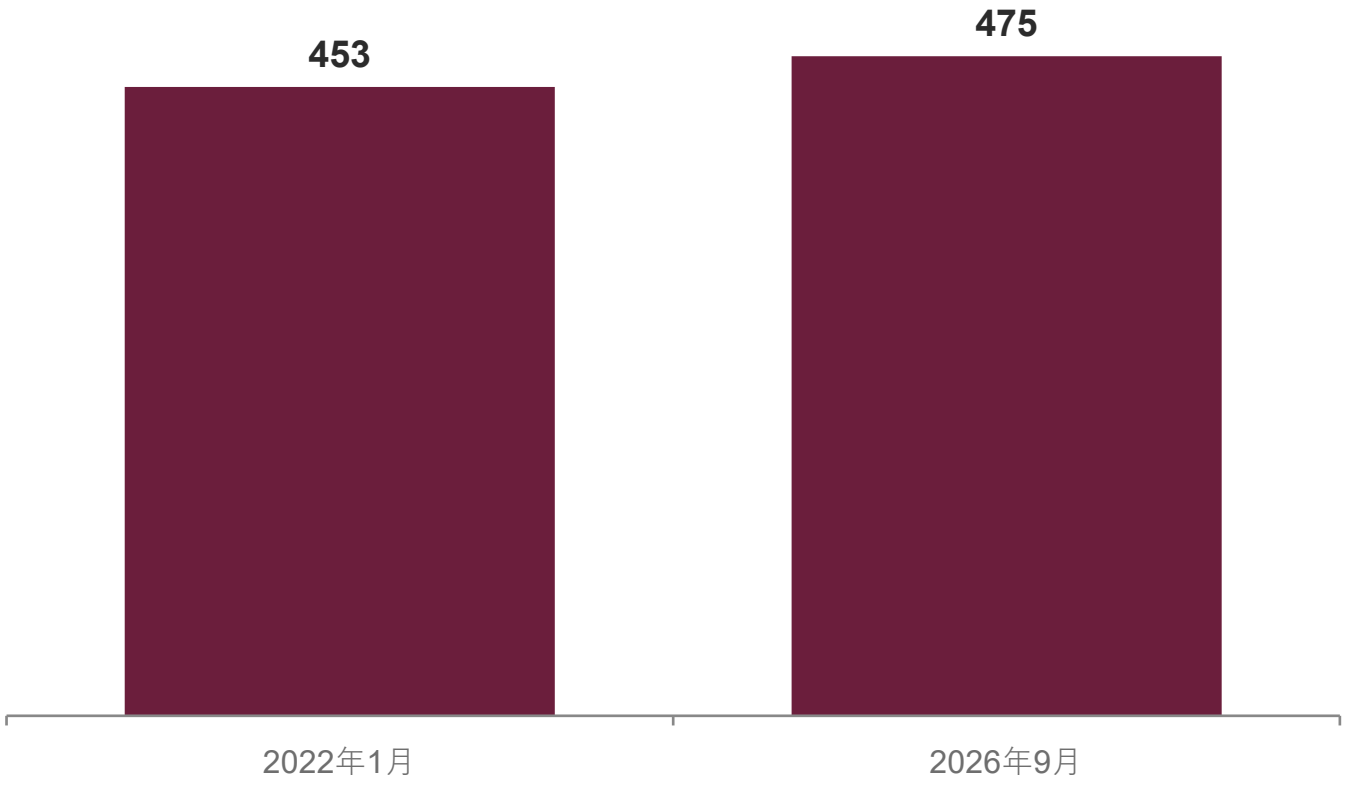
収穫期が早いため、秋の長雨や台風の影響を受けやすい。

テロワールを映す

土壌・気候の違いが味わいに直結し、産地ごとの個性が際立つ。

MOMENTUM

拡大を続ける日本ワインの裾野



475場

2026年9月時点の
全国ワイナリー数

国内ワイン消費量も
過去10年で約1.3倍に拡大

GLOBAL TREND

世界でも進む、冷涼産地の躍進

気候変動の影響は世界共通。かつて「不向き」とされた冷涼な土地が、いま新しいワインの銘醸地として脚光を浴びています。日本もこの世界的な潮流の一部です。



イングランド

温暖化の恩恵を受け、英国産スパークリングワインが世界的な評価を獲得するまでに成長。



シャンパーニュ（仏）

かつて数年に一度だった高級キュヴェが、2002〜2009年は毎年リリースされるように。



日本

北海道に続き、長野・東北など各地の冷涼な土地がピノ・ノワールの新たな適地に。

THE SCIENCE

転機は1998年 — 気候シフトの科学的根拠

農研機構（NARO）の研究により、1998年を境に北日本で気温シフトが起きたことが明らかに。ピノ・ノワールが育つ「4〜10月平均気温14℃以上」の地域が、北海道内で着実に広がっています。

1998年

気候シフトが
確認された年

14℃以上

ピノ・ノワール
栽培適温の目安

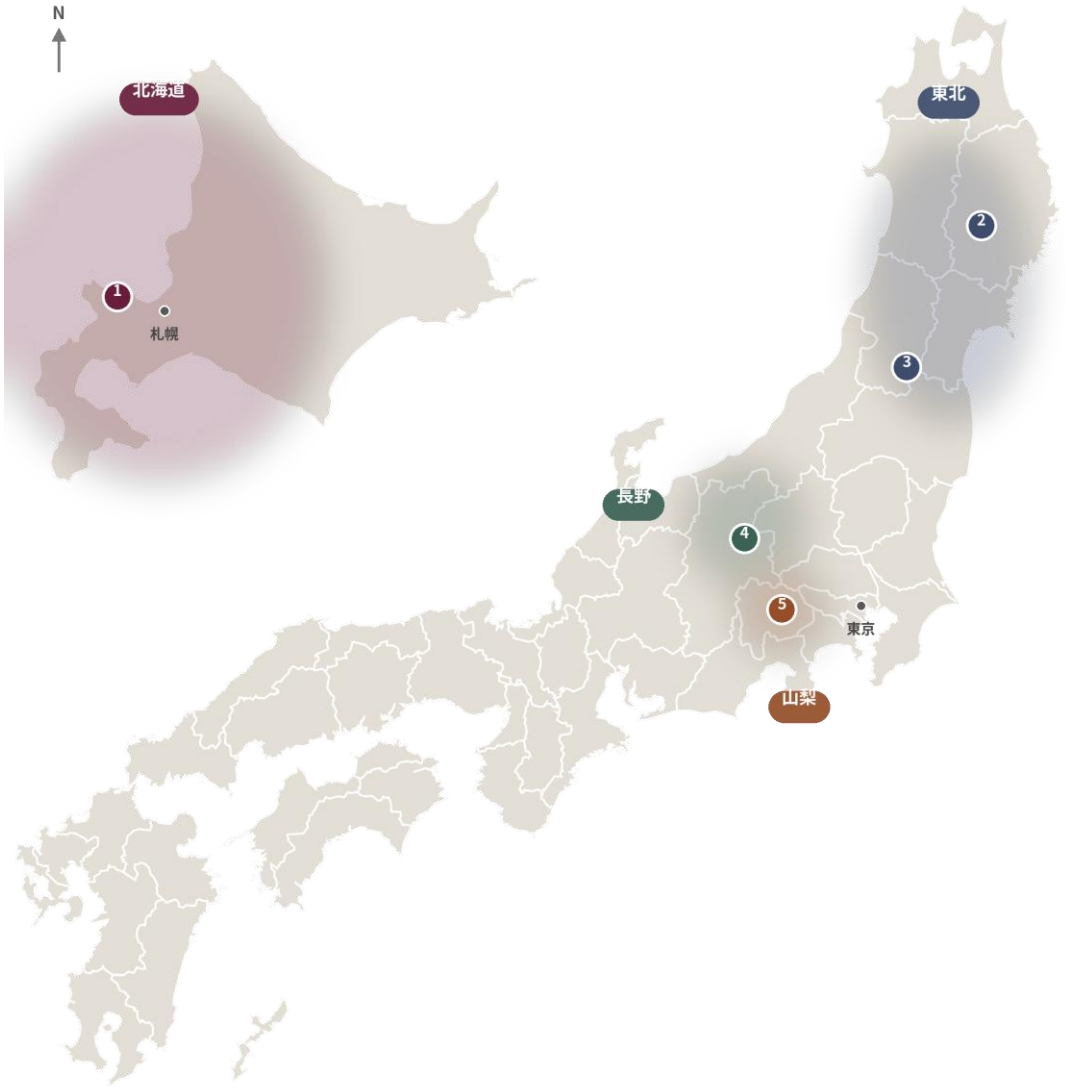
10→33ヶ所

北海道の
ワイナリー数
（1999年以前→2017年）

出典：農研機構 寒地気候変動グループ「気候変動により、北海道の代表的産地で高級ワイン用ブドウ『ピノ・ノワール』が栽培可能に」（2017年）

MAP

日本のピノ・ノワール フロンティア



北海道

1 余市町

東北

2 花巻市（岩手）

3 高畠町（山形）

長野

4 東御市・小諸市（千曲川ワインバレー）

山梨

5 甲州市勝沼

REGION SPOTLIGHT

北海道 — 先駆者としての存在感

後志地方を中心に、国内で最も早くピノ・ノワール栽培に取り組んできた地域。気候シフトを追い風に、栽培面積・ワイナリー数ともに拡大を続けています。

約2.5倍

ピノ・ノワール栽培面積の伸び
（2010年16.8ha→2020年40.1ha）

後志地方が中心地

余市町・仁木町・小樽市に、老舗から新進まで多くのワイナリーが集積。

国内外での評価

アカデミー・デュ・ヴァンなど専門家からも「勢いが止まらない」と評される産地に成長。

先行者としての知見

1990年代からの試行錯誤の蓄積が、他地域の栽培技術にも波及している。

REGION SPOTLIGHT

長野 — 急成長する千曲川ワインバレー

東御市・小諸市を中心とした千曲川ワインバレー、そして八ヶ岳西麓地区では、冷涼な気候を生かしたピノ・ノワール／ピノ・グリの産地形成が進んでいます。

71→100場

県内ワイナリー数の目標
（2023年時点→10年後目標）

約1.9倍

ワイン用ぶどう生産量の伸び
（2010年3,645t→2019年6,789t）

八ヶ岳西麓地区：「ピノ・ノワール」や「ピノ・グリ」など冷涼な気候に合った品種の新しい産地として存在感を高めている。

REGION SPOTLIGHT

山梨 — ワイン発祥の地の新たな挑戦

ワイナリー数・生産量ともに全国トップを誇る日本ワイン発祥の地。伝統的な甲州・マスカット・ベーリーAに加え、冷涼な高標高地では赤ワイン用品種への挑戦も始まっています。

全国最多のワイナリー数

2026年時点で92場が集積し、全国シェア約19%を占める国内最大の産地。

150年を超える歴史

明治初期にワイン醸造が始まった、日本ワインのルーツと言える土地。

温暖化への対応課題

夏季の高温化が進む中、標高の高い涼しい区画での新たな品種選定が模索されている。

REGION SPOTLIGHT

山形・岩手 — 次に来る、東北の可能性

北海道と同じメカニズムで、東北の冷涼な土地にもピノ・ノワールの適地が広がりつつあります。新規参入も相次ぎ、全国ワイナリー数ランキングでも存在感を高めています。

山形県

全国4位（25場）

高畠町・上山市などが集積地。冷涼な盆地気候を生かした赤ワイン用品種の栽培が拡大。

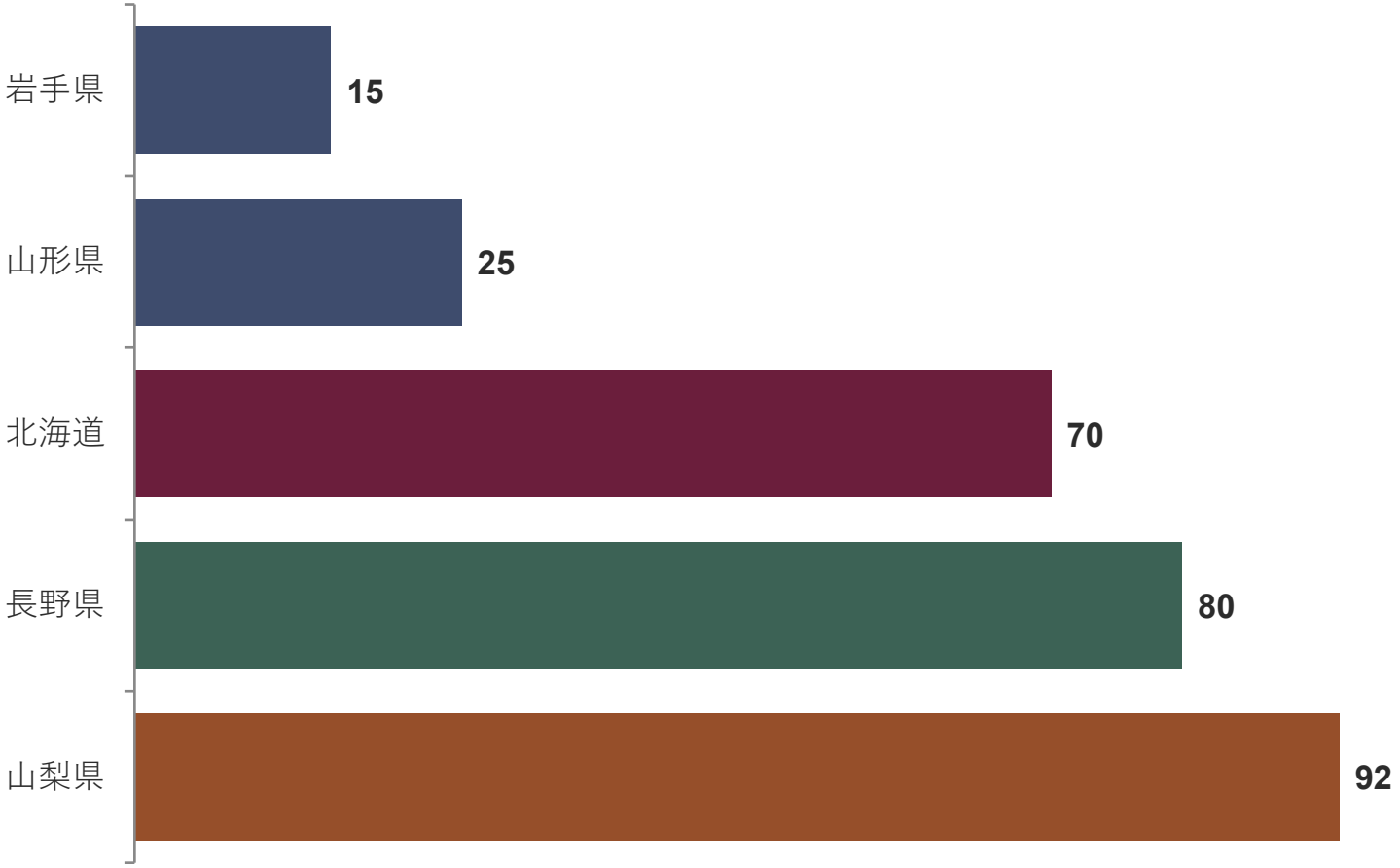
岩手県

全国5位（15場）

花巻市の老舗「エーデルワイン」をはじめ、新興ワイナリーの開業が相次ぐ成長産地。

NATIONAL RANKING

全国ワイナリー数ランキング（2026年9月）



475場

全国のワイナリー総数

上位3県（山梨・長野・北海道）で全体の約51%を占める。いずれもピノ・ノワールへの取り組みが進む産地。

RECOGNITION

高まる、日本ワインへの国際的評価

デキャンター・ワールド・ワイン・アワード（DWWA）やIWCなど、世界的なワインコンクールでの日本ワインの受賞が年々増加しています。



津軽 シャルドネ＆ピノ・ノワール スパークリング 2019

DWWA 2025：シルバー　／　IWC 2025：ゴールド　／　IWSC 2025：シルバー

ピノ・ノワールを使った国産スパークリングが、複数の国際コンクールで高評価を獲得した一例。



日本ワイン全体でも、DWWAでの受賞数が年々増加傾向にある。



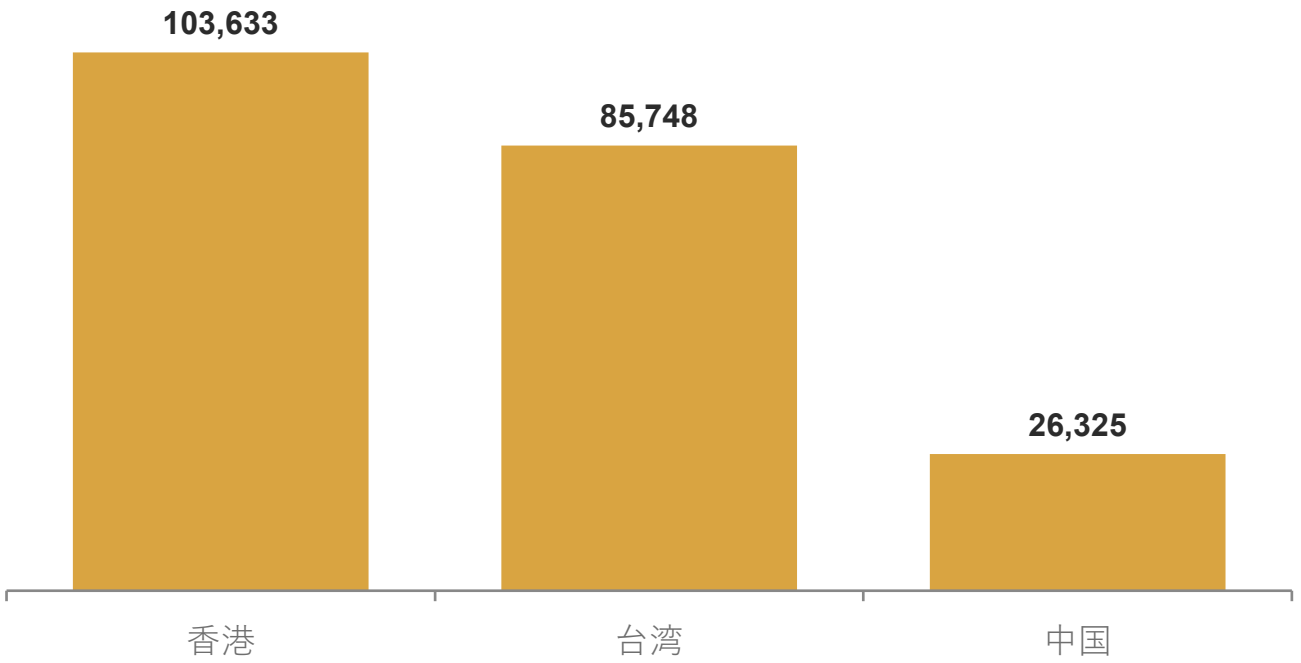
北海道産ワインは、海外の専門家からも「勢いが止まらない」と評される存在に。

EXPORT POTENTIAL

海外展開という、もうひとつの可能性

日本ワインの輸出量はまだ小さいものの、アジアを中心に高級ワインとしての評価が広がっており、今後の成長余地として注目されています。

主要輸出先（金額ベース、2018年）



アジア圏が中心

台湾・香港・中国向けが輸出の大部分を占め、特に香港は高額帯の日本ワインの販売地として機能している。

輸出量自体は限定的で、今後の成長余地は大きい。

CHALLENGES

可能性の一方で、立ちはだかる課題



多湿・梅雨による病害リスク

欧州の主要産地と異なり、生育期の降雨が多く、灰色かび病などのリスクが高い。



労働力・後継者の不足

小規模農家の高齢化が進み、栽培を担う人材の確保が全国的な課題に。



適地・土地コストの制約

平坦で冷涼な優良農地は限られ、新規参入のハードルとなっている。



異常気象のリスク

台風・突発的な高温など、年による気象の振れ幅が栽培を不安定にする。

INDUSTRY SUPPORT

産地の成長を支える官民の取り組み



GI制度の整備

山梨・北海道・山形などで地理的表示（GI）が導入され、産地のブランド価値を保護。



産学官の連携

自治体・大学・生産者が連携し、栽培技術や人材育成の基盤づくりを推進。



ワインツーリズムの拡大

産地を巡る観光需要が高まり、新規就農者や投資を呼び込む好循環を生んでいる。



新規参入と世代交代

若い世代や異業種からの新規参入が相次ぎ、小規模・高品質志向のワイナリーが増加。

THE ROAD AHEAD

今後の可能性 — 日本ワインの新しい地図



「点」から「面」への広がり

北海道という一つの成功事例から、長野・東北など複数の産地が並走する構造へ移行しつつある。



標高・緯度のフロンティア

高標高地や、より北への展開余地はまだ残されており、栽培適地の探索は続く。



プレミアムブランドとしての確立

希少性と品質の両立により、日本産ピノ・ノワールが世界的な評価軸に加わる可能性。



産地間連携という強み

各地の知見を共有し合うことで、単独では難しい技術革新や市場開拓を加速できる。

まとめ

日本ワインの新しい地図が、いま描かれている

気候変動は、日本のワイン産地に静かな地殻変動をもたらしています。北海道が切り拓いたピノ・ノワールへの挑戦は、いま長野・山形・岩手など全国へと広がり、日本ワインの可能性を面として押し広げつつあります。

多湿による病害や労働力不足といった課題は残るものの、GI制度の整備やワインツーリズムの広がり、新しい世代の参入がその歩みを後押ししています。

「点」から「面」へ── 日本のピノ・ノワールは、これからが本番です。

REFERENCES

参考情報・出典

- 農研機構（NARO）「気候変動により、北海道の代表的産地で高級ワイン用ブドウ『ピノ・ノワール』が栽培可能に」（2017年）
- 信州ワインバレー構想推進協議会「信州ワインバレー構想2.0」（長野県、令和5年3月）
- 山梨県「日本のワイン生誕の地」／地理的表示『山梨』公式ページ
- 日本ワイナリー協会、ワインターミナル統計「日本のワイナリー数・都道府県ランキング」（2026年）
- 国税庁課税部酒税課「酒類製造業及び酒類卸売業の概況」各年版
- キリンホールディングス「国内のワイン消費数量推移」（2024年）
- 日本ワイン輸出統計に関する分析（Japan Wine Nomics ブログ、貿易統計に基づく）
- サントリー「デキャンター・ワールド・ワイン・アワード2025 受賞情報」

本資料は公開情報をもとに作成した一般向けの解説資料です。